世界文学全集 17

ゾ　ラ

居　酒　屋

黒田憲治 訳

河出書房

世界文学全集

© 1969

編集委員
阿部知二　伊藤　整
桑原武夫　手塚富雄
中島健蔵

昭和36年 2月25日　初版発行
昭和44年 8月 1日　28版発行

定価 430円

訳　　者　黒田憲治
発行者　中島隆之
印刷者　多田　基
装　　幀　原　　弘
印　　刷　多田印刷株式会社
製　　本　美行製本有限会社

発行所　東京都千代田区神田小川町三の六　株式会社　河出書房新社
電話東京（292）大代表 3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

居酒屋……一
年譜……四五
解説……（多田道太郎）四三

居酒屋

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

主要人物

ジェルヴェーズ　洗濯女。すこしびっこだが美人で働きもの。ランチエの内縁の妻、二人の間にできた二児クロードとエチエンヌを連れてともにパリに出奔。まもなく男に捨てられ、クーポーと結婚。洗濯屋を開業。繁昌するが、クーポーがぐれだすにつれ、同居中のランチエとよりがもどり、商売も失敗。夫と同様、飲酒におぼれ、乞食同然となって死ぬ。

クーポー　ブリキ職人。働きものだったが、屋根から落ちて大けがをして以来、飲酒癖におかされ、ついにアルコール中毒となり、病院で狂い死にする。

ナナ　クーポーとジェルヴェーズの娘。パリ下町の不良少女。はじめ造花女工だったが、貧乏ぐらしをきらって、家を出る。

グージェ　鍛冶工。気はよわいが、ヘラクレスのような偉丈夫。《グール・ドール》(黄金の口)というあだ名。ジェルヴェーズに純愛をささげ、結婚資金を彼女の開店費用に贈る。親孝行で、母と暮らしている。

ランチエ　帽子職人。パリに出てから正業につかず、ジェルヴェーズを捨てて、アデールを愛し、やがてクーポー夫婦と同居。かつての内妻を誘惑して、彼女にたかって生活する。彼女の商売が失敗すると、こんどはヴィルジニーに乗りかえる。紳士然とした要領のいい女たらし。

ヴィルジニー　アデールの姉。ジェルヴェーズと洗濯場で大喧嘩をする。お人よしの巡査ポワソンの妻となり、のちジェルヴェーズの店を引きついで菓子屋を開業。ランチエの情婦となる。

ロリユ夫婦　鎖つくり職人。おかみはクーポーの実姉。夫婦ともエゴイストで意地悪。

マダム・ルラ　クーポーの長姉。未亡人。造花女工。ナナの監督をひきうける。

ボッシュ夫婦　ジェルヴェーズのいるアパートの門番。ともに食いしんぼう。

ビビ・ラ・グリヤード
メ・ボット
ベック・サレ
ビジャール　錠前職人。酒乱。そのため女房も殺され、八つになる少女ラリーも悲惨な死をとげる。
バズージュおやじ　死体運搬人。
コロンブおやじ　《居酒屋》の主人。

} 陽気な飲んだくれの労働者。

序

《ルーゴン・マッカール》叢書はおよそ二十冊の小説で構成されるはずである。一八六九年以来、全体のプランはきまっており、私はきわめて厳格にそれにしたがっている。こんどは《居酒屋》の番である。私がそれを書くにあたっては、他の小説もそうするつもりだが、自分のきめた一線から片時もはずれまいとした。これは私の強みである。私は一つの目標をもち、それにむかって進む。《居酒屋》が新聞に発表されたとき、それは比類のない暴言で攻撃され、非難され、あらゆる罪をせおわされた。いまここで数行をついやして、私の作家としての抱負を説明することがはたして必要だろうか？　私は労働者の一家の宿命的な転落を、パリの場末の腐りきった環境のなかでえがきたいと思った。泥酔と怠惰のはてに、家族関係の弛緩、不潔な乱倫があり、しだいにまともな感情を忘れ、結局ゆきつくところは、恥辱と死である。これはただ、生きた教訓と考えるべきだ。

《居酒屋》はたしかに私の著書のうちでもっとも純潔である。私はしばしばひどくおそろしい傷口にふれねばならなかった。形式だけが人をおびえさせた。ひとびとはことばに憤激した。私の罪は民衆のことばをひろいあつめて、それを精根つめてつくった鋳型のなかへ流しこむという文学的好奇心をもったことにある。ところが、どうだろう！　形式というそこのところにひどい罪をかぶせられるのだ！　しかし民衆語の辞典はいくつかあって、文学者たちはこのことばを研究し、その辛辣さ、意外さ、イメージの力づよさに興趣をかんじている。ものずきな文法家にとってそれは凝ったごちそうなのだ。それなのに、だれも、私の意志が純粋に言語学的な仕事をすることにあると気づかなかった。私は歴史的、社会的なはげしい興味から、この仕事をほんとにそういうものだと信じているのだ。

ともかく私は自己弁護はしない。この作品が弁護してくれるだろう。これは真実の作品であり、嘘をつかぬ、また民衆のにおいをもった最初の民衆小説である。だが、民衆というものが根っから悪いものだと結論してはならない。というのは、私の作中人物は悪くはない。彼らはただ無知で、はげしい仕事と貧困との生活環境にむしばまれているにすぎないからだ。ただことわっておきたいのは、私という人間と私の作品とについて世間に流

布している奇怪で醜悪な、ありきたりの判断を早のみこみするまえに、私のいろいろな小説を読み、それを理解し、その全体をはっきりつかんでほしいということだ。じっさい、大衆をおもしろがらせているあのあきれかえった伝説を、私の友人たちがどんなにおかしがっているか、それを知っていただけたら！　吸血鬼とか残忍な作家とかいわれる人間が、りっぱな市民であり、みずからの分をまもっておとなしく生活する篤学と芸術の士であり、ただ一つの野心として、可能なかぎり幅のひろい、生きいきした作品を書きのこそうとしているにすぎないのだということを知っていただけたら！　私はいかなる作りばなしにも反論はしない。私は仕事をし、時と公衆の誠意とに身をゆだねる。だが、結局さいごには、山とつまれた無礼な言辞をきりひらいて私の真価がみとめられることになるだろう。

一八七七年一月一日　　パリにて

エミール・ゾラ

一

ジェルヴェーズは朝の二時までランチエを待っていた。それからうとうと眠ってしまった。ブラウスのまま肌をさすような窓辺の風に身をさらしていたのでぞくぞく寒気をかんじ、頬をなみだでぬらして、熱っぽいからだを寝台になげに横たえたのである。この一週間、彼は《双頭の子牛軒》で食事をしてそとへでると、仕事をさがしてくると言っては、彼女を子供たちといっしょに寝にかえらせ、夜ふけにならぬと帰ってこなかった。昨夜も彼の帰りをうかがっていると、彼らしい姿がグラン・バルコンのダンスホールへはいってゆくのを見かけたように思った。ホールの燃えるようにあかるい十個の窓が、郭外大通りの暗いながれを、火事かと見まごう光で一面にてらしていた。彼のうしろには、おなじ食堂で食べている金物みがき女工の小がらなアデールが、五、六歩おくれてあるいているのが見えた。彼女は入り口のランプのまぶしすぎる光の下を男といっしょに通りすぎな

いよう、たったいま彼の腕をはなしたばかりというかっこうで、両手をぶらぶらさせていた。

五時ごろジェルヴェーズは、からだが硬ばり腰がいたんで目がさめた。そして、わっと泣きだした。ランチエが帰っていなかったのだ。彼ははじめて外泊したのである。紐で天井にむすびつけた細木から、色あせたインド更紗のぼろぎれがたれさがり、その下で彼女は寝台のはしにじっと腰をおろしていた。そして、涙にくもる目で、ゆっくりと、みすぼらしい家具つき部屋を見まわした。家具といっても、引き出しが一つなくなっている胡桃のたんすが一つ、藁椅子が三脚、脂じみた小さなテーブルが一つ。そのテーブルには縁のかけた水差しがおきっぱなしになっている。ほかに子供用に鉄の寝台が一つそなえてあったが、これはたんすのじゃまをし、部屋の三分の二をふさいでいた。ジェルヴェーズとランチエのトランクは隅のところでぽっくり口をあけ、中身のがらんどうなことを見せていたが、底のほうには男物の古帽子がきたないシャツや靴下のしたにつっこんであった。一方、壁には、家具の背の上に、穴のあいたショールが一枚、泥のしみついたズボンが一着、それに古着屋も相手にしないようなぼろ着がぶらさがっている。暖炉の中央、ちぐはぐな二つのブリキの燭台のあいだに、うすもいろの公設質屋の質札が束にしておいてある。この部屋はこのホテルではきれいなほうで、二階部屋で大通りに面していた。

そのあいだ、二人の子供は一つ枕にならんで眠っていた。八つになったクロードは、かわいい両手を夜具のそとになげだして、すやすや寝息をたてている。エチエンヌはまだ四つだが、片方の腕を兄の頸にあて、笑顔をみせていた。母親の泣きぬれた視線が子供たちのうえにおちると、またしても彼女はすすり泣きしそうになり、ほとばしりでるむせび音をおさえるため口にハンカチを押しあてた。それからぬげたぼろ靴をはきなおそうともせず、裸足のまま、また窓ぎわにもどって肱をつき、遠くの歩道に目をくばりながら、ふたたび徹夜の人まちをはじめた。

ホテルはシャペル大通りにあって、ポワソニエール市門の左手にあたる。三階建てのあばら屋で、三階までぶどう酒のしぼりかすのような赤紫色に塗られ、鎧戸は雨でくさっていた。ガラスにひびのはいった角燈の上のほう、二つの窓のあいだに、つぎのように書いてあるのがどうやらこうやら読みとれる。《ボンクール館、マルスリエ経営》。それは黄色い大きな字だが、漆喰にかびがはえて、ところどころ消えていたのである。ジェルヴェーズは角燈がじゃまなので、くちびるにハンカチをあてたまま背のびをした。右手のロシュシュワール大通り

をながめると、そこの屠殺場の前に肉屋たちが血まみれのエプロンすがたでたむろしていた。このため、さわやかな風がときどき悪臭や、屠殺された動物のなまぐさい匂いをはこんできた。彼女は左手を見る。大通りの長い街路に目をはしらせ、まっ正面にちかいところに目をとめる。当時建築中だったラリヴォワジエール病院の白っぽい建物である。それから入市税関の壁にそって、視野の端から端へゆっくりと見てゆく。その壁の向こう側から、夜になると、ときどき人の殺される悲鳴がきこえる。彼女は短刀で腹を刺されたランチェの死体を見つけるのではないかとひやひやしながら、さみしい町かどや、陰気で、湿気とごみによごれたすみずみを探るように見た。一本の不毛の帯で市街をとりかこむ灰色のはてしない城壁のかなたを見上げると、そこには夜明けのあかりがさし、金色の陽のひかりが立ちこめて、はやくもパリの朝のどよめきが満ちている。けれども、彼女は、入市税関のずんぐりした二棟の建物のあいだをモンマルトルやシャペルの高台からおりてきた人馬や荷車のたえまない流れが通るのを見てぼうっとしてしまうと、頸をのばしたままの姿勢で、またもやポワソニエール市門に視線をかえすのであった。そこではひとびとが群れになって通ってゆく。とつぜん通行がとまって、群集が路上に沼のようにひろがる。仕事にゆく労働者たちが、道具を背中に、弁当を小脇にかかえて、あとからあとから列をなして通る。こうして騒々しい人群れはたえまなくパリに流れこみ、そこに溺れこんでしまうのだ。ジェルヴェーズはこの人群れのなかにランチェを見つけたように思ったので、落ちそうになるのもかまわず、ぐっと身をのりだした。そして、苦しみをおしこむように、ぎゅっと強くハンカチを口にあてがった。

わかわかしい陽気な声が彼女を窓からひきはなした。

「旦那は留守だね、ランチェさん！」

「そうよ、クーポーさん」と彼女はむりに笑顔をつくって答えた。

男はホテルのてっぺんにある十フランの小部屋を借りているブリキ職人だった。肩に道具袋をかけている。ドアに鍵がつっこんであるのを見て、気軽にはいってきたのだ。

「ねえ」と彼はつづけた。「いま、おれは、あそこ、病院で、仕事してるんだが……。どうです！　このけっこうな五月の陽気は！　今朝は寒くてぴりぴりするね」

そして、泣きはれたジェルヴェーズの顔をみつめた。彼は寝床がみだれてないのをみて、かるく首をふったが、天使のようなばら色の顔をしてあいかわらず眠っている子供たちの小さい寝台に近づくと、声をひそめて、「ねえ。旦那はおとなしくしていないらしいね？……だ

が心配はいりませんぜ、おかみさん。あの人は政治に夢中なのさ。このあいだも、いい人らしいがあのウジェーヌ・シューの賛成投票をしたときにゃあ、まるで気ちがいだったね。きっと仲間といっしょに、あの悪党のボナパルト（当時の大統領。のちのナポレオン三世）の悪口を言って夜あかししたんだ」

「ちがうわ、ちがうわ」と彼女はやっと声にだして言った。「あんたの思っているようなことじゃないの。ランチェの居どころなら分ってるわ……。あたしたちだって人並みに苦労があるのよ。しようがないわ！」

クーポーは目くばせして、この嘘にはだまされないぞということを示した。それから、外へ出たくないなら、おれが牛乳をとりにいってあげる。あんたは美人で気のいいひとだ。こまることがあればいつでも、力になるよ。そういって出ていった。彼が側をはなれると、ジェルヴェーズはまた窓辺に腰をすえた。

市門のところは朝の寒さのなかで雑踏がつづいていた。錠前屋は青い作業服、左官は白いズボン、ペンキ屋は下に着こんだ長い仕事着を裾にのぞかした外套と、それぞれ見分けがついた。この群集は遠くから見ると、白っぽいぼやけたものになり、あせた青色とよごれた灰色との目だつ、何色ともいえない色合いをしていた。ときどき労働者が一人立ちどまると、パイプの火をつけなおす。だが、まわりのものは笑い声ひとつたてず、仲間にひとこと物を言うでもなく、土色の頬をし、顔をパリのほうへつき出して、あいかわらずあるいていった。パリーはフォーブール・ポワソニエールの広すぎる道路から、彼らを一人ずつくわえこんでゆくのである。けれどもポワソニエール街の二つの町かどでは、鎧戸をあげた二軒の酒場の戸口で、数人の男があゆみをゆるめた。彼らは店にはいらぬうちから、もう一日じゅうのらくらするんだという気分にまきこまれ、腕をぶらんとさせ、パリを横目でうかがいながら歩道のわきにたたずんでいた。カウンターのまえでは、いく組かの客が、立ったままで仲間におごったりおごられたりして、われを忘れている。彼らは店にあふれ、唾をはき、咳をし、小さなグラスでちびちび咽喉を浄めていた。

ジェルヴェーズは街の左側のコロンブおやじの店を見張った。どうもランチェを見かけたような気がしたのだ。そのときエプロンすがたで帽子もかぶらぬ太っちょの女が、道路のまんなかから彼女に問いかけた。

「まあ、ランチェさん、ずいぶん早起きねえ！」

ジェルヴェーズはからだをのりだした。

「まあ！　あんただったの、ボッシュのおかみさん！……きょうは仕事がうんとあるのよ！」

「そうだろうねえ。ほっといたら何にも片づかないもの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

ね」

こうして窓と歩道とのあいだで話がとりかわされた。ボッシュのおかみさんは一階が食堂《双頭の子牛軒》になっている家の門番だった。ジェルヴェーズは男ばかりが食事をしているのにまじって、ひとりぽっちで食べるのがいやさに、いくどとなく彼女の門番部屋でランチエを待たせてもらった。この門番女はひとっぱしりシャルボニエール街までいって、ある勤め人の寝ごみをおそうのだと言った。彼女の亭主が、その人のフロック・コートの修理をなかなかさせてもらえないからだという。すると、こんどは下宿人のうわさ話になった。ある男が昨夜女をつれこんで朝の三時までみんなの安眠妨害をしたという話である。だが、おしゃべりをしながらも彼女は鋭い好奇心にかられた様子で、若い女の顔を穴のあくほど見ていた。そして、そこへきて窓の下に立ったのも、どうやら様子を知りたい一心らしい。

「ランチエさんはまだ寝てるの？」と、不意に彼女はたずねた。

「ええ、寝ています」と、ジェルヴェーズは答えたものの、顔を赤らめないではいられなかった。

ボッシュのおかみさんは、ジェルヴェーズの目が涙ぐむのを見た。それでたぶん気がすんだのだろう、男なんてものはしようのないのらくら者だと言い捨てて、その場をはなれた。が、すぐとって返して、叫んだ。

「今朝じゃなかったの、あんたが洗濯場へゆくのは？……あたしも洗う物があるから、そばに場所をとっておくわ。そのとき話をしようね」

それから、ふと、あわれを催したのか、

「かわいそうに、そんなところでいつまでもいないほうがいいわよ。風邪をひいてしまう……顔色がまっ青よ」

それでもジェルヴェーズは八時まで二時間のあいだ、じりじりした気持ちで窓辺にがんばった。商店はひらいた。高台からおりてくる作業服のながれはもうとまっていた。遅刻したひとだけが幾人か大股に市門を通っていった。酒場ではさっきとおなじ男たちが立ったままで、あいかわらず、飲んだり咳をしたり唾をはいたりしていた。男の労働者たちのあとには、女工たち、つまり金物みがきや、仕立工や、造花つくりがつづいた。うすっぺらな服をきゅうくつそうに着て、郭外大通りをせかせかと歩いてゆく。三人か四人ずつ連れになって、かるい笑い声をたてたり、きらきらする視線をあたりに投げたりしながら元気よくしゃべっていた。だが、ときたま、青白いきまじめな顔をしたやせた女が、ひとりぽっちできたない水をよけながら入市税関の壁のところをつたい歩きしていった。ついで、勤め人たちが通りすぎる。指に息をはきかけたり、歩きながら一スーのパンをかじってい

る。若い連中で、やせこけたのがいる。服はちんちくりん、目にはくまができ、どろんとして眠そうだ。小柄な老人たちはすたすたと足早に通りすぎた。長時間の事務所づとめにつかれきって、青い顔をしているが、時間ぎりぎりにまにあうよう歩度を加減するために、時計をのぞきこむ。やがて、大通りには朝の平和がきた。近所の年金生活者がぶらぶら日向を散歩する。髪もスカートもきたない母親たちが赤ん坊をだきかかえてゆすぶったり、ベンチでおむつをとりかえたりする。鼻たれのみっともないかっこうをした腕白小僧たちが、押したり突いたり、地面をはいまわったりする。悲鳴や笑い声や泣き声がおこる。ジェルヴェーズは、もう、心痛に気もとおくなり、希望もつきはて、息がつまりそうだった。すべてが終わった、時間も尽きた、ランチエはぜったいに帰ってくるまい。彼女はそう思った。うつろな視線をはしらせて、虐殺と悪臭に黒ずんだ古い屠殺場から、白っぽい、ま新しい病院をながめた。いく列もの窓はまだぽっかり穴があいたようだが、やがて死が猛威をふるうその室内が飾りつけもしてないまま、そこから見てとれた。彼女の正面、入市税関の壁のかなたで大空がかがやき、パリの巨大な目ざめのうえにのぼってきた朝の太陽が彼女の目にまぶしかった。

若い女はもう泣きもせず、手をぶらんとたれたまま椅子にすわっていた。そのときランチエが、そっとはいってきた。

「まあ、あんた！　あんた！」彼女はそう叫んで夫の頸に抱きつこうとした。

「そうさ、おれだよ。それで、どうかしたかい？　ばかなまねはしないでくれよ、なあ！」と彼は答えた。

彼は女をおしのけた。それから不機嫌な様子で、黒いフェルトの帽子をたんすのうえへさっと投げた。この若い男は二十六歳、小柄で、髪は濃い褐色、顔立ちはきれいだった。うすい口ひげをはやしていて、機械的に手をうごかしては、たえずそれをもみ上げる。仕事着用のズボンをはき、腰でしぼった古い、しみのついたフロックを着ていた。しゃべると、とてもひどいプロヴァンス（南フランス）なまりだった。

ジェルヴェーズはまた椅子に腰をおろし、きれぎれなことばで、しずかにぐちをいった。

「あたし、眠れなかったの……あんたが殴られでもしたかと思って……どこへ行ってたの？　どこで泊まったの？……おねがい！　もうこんなことしないでね。あたし、気が変になるわ……ねえ、オーギュスト、どこへ行ってたの？」

「用事のあったところにきまってるさ！」と彼は肩をすくめながら言った。「八時にはグラシエールの友だちの

とこにいたよ。こいつは帽子工場をつくるはずなんだ。遅くなったんで、泊まることにした……。それに、わかってるだろうが、おれは根ほり葉ほり聞かれるのはいやだぜ。そっとしといてくれ！」

若い細君は、また泣きだした。ランチェがどなり、乱暴に椅子をたおしたので、子供たちは目をさましてしまった。彼らは半分はだかのままからだをおこし、小さな手で髪をかき上げた。だが母親の泣き声をきくと、まださめきらぬ目に涙をためて、いっしょにぎゃんぎゃん泣きだした。

「ああ！　うるさいぞ！」とランチェはいきりたって叫んだ。「言っとくが、おれはまた出てゆくからな！　そうなったら、こんどはそれっきり、ゆきっぱなしだぞ……。泣くのをやめないか？　じゃあ、さよならだ！　おれは来たところへ帰るさ」

このときもう彼はたんすのうえの帽子をとりあげていた。だが、ジェルヴェーズは駆けよって、口ごもりながら言った。

「いけない、いけないわ！」

それから彼女は機嫌をとりながら子供たちの涙をおしとどめた。髪にくちづけをしてやり、やさしいことばで彼らをもう一度寝かした。子供は急におとなしくなり、枕をしたまま笑って、つねりっこをして遊んだ。けれども父親のほうは靴を脱ぎもせず、寝台に身を投げだしたが、疲れきった様子で、不眠のために顔もまだら模様になっていた。が、彼は眠ってはいなかった。目を大きく見ひらいて部屋じゅうを見まわしていたのだ。

「きれいなもんだな、ここは！」彼はつぶやいた。

それからジェルヴェーズをちらっと見て、意地わるくつけたした。

「おい、おまえはもう顔を洗うのをやめにしたのか？」

ジェルヴェーズはまだ二十二歳だった。すこしやせ型で大柄、顔立ちはほっそりしていたが、もう世帯やつれが見えていた。髪はみだれ、ぼろ靴をはき、家具のほこりや脂のしみついた白いブラウスすがたで寒さにふるえている。心痛と涙ですごした数時間で、彼女は十も歳をとったようにみえた。ランチェのことばが、彼女に、びくびくしてあきらめきっていた態度をすてさせた。

「変なこと言う人ね」と彼女は怒りにかられて言った。「あたしが、できるだけのことをしているの、知ってるじゃないの。あたしたちがこんなにみじめになったの、なにもあたしのせいじゃないわ……。子供を二人かかえて、お湯をわかすかまどもない部屋で、あんたならどうするか、見たいものだわ……。パリへ来たとき、居食いなどしないで、はじめの約束どおり、すぐ仕事を見つけるべきだったのよ」

「なんだと！」と彼は叫んだ。「おまえだっていっしょにあのへそくりを食いつぶしたじゃないか。食べたごちそうに唾をはくなんて、今となっては、そうは問屋がおろさんぞ！」

けれども彼女は聞く耳もたぬというふうにつづけた。「とにかく、元気をだせば、まだなんとか切りぬけられるわ……。ゆうべ、新町の洗濯屋のフォーコニエの奥さんに会ったの。月曜日にあたしを雇ってくれるって。あんたがグラシエールのお友だちといっしょにやれば、六か月もしないうちに、あたしたち浮かびあがれるわ。そのあいだに、身につけるものもできるし、どこかにちっちゃなねぐらも借りられる。自分の家で住めるのよ……。ほんとに！　働くのよ、働かなきゃだめよ……」

ランチエは、うるさそうに壁のほうへ寝返った。それでジェルヴェーズはかっとした。

「そう、そうよ、あんたは仕事をするのが好きで好きでたまらないという人じゃない、それはわかってるわ。なにか大きなことがしたくてむずむずしているのよ。旦那ぶったかっこうをして、絹のスカートをはいた淫売をつれて歩きたいんだわ。そうでしょう？　あたしの着物をなにもかも質屋にもってゆかせてからは、もうあたしにいやけがさしたのよ……。ねえ、オーギュスト、こんなこと言いたくないし、もっとあとで言おうと思っていたことだけど、あたし、ゆうべあんたが泊まったところ知ってるわ。あんたがあのアデールの淫売とグラン・バルコンへはいってゆくの見たのよ。まったく！　いいのをつかんだものね！　あの女は、ごりっぱなもんですよ！　奥方みたいなかっこうをしているのも、あたりまえだわ……。食堂へ来る男たちみんなと寝たんだものね」

がばっと、ランチエは寝台から飛びおりた。その目は青ざめた顔のなかで、黒いインクのようになった。この小男のなかで、怒りが嵐をよんだ。

「そうよ、そうよ、食堂じゅうの男たちみんなとよ！」と若い女はくりかえした。「ボッシュのおかみさんはあの二人、あいつと姉ののっぽとを追い出すつもりよ。だって、階段にはしょっちゅう、男の行列なんだもの」

ランチエは両こぶしをふり上げた。だが相手を殴りつけようとする気持ちをおさえ、女の両腕をつかんだまま、ひどく彼女をゆすぶり、子供の寝台のうえへつき倒した。子供たちはまたもや泣き出した。そこで彼はふたたび寝ころび、ためらっていた決心をきっぱりきめた男らしく、残忍な態度でどもりながら、

「おまえは、自分が今なにをやったか、わかってないんだ、ジェルヴェーズ……。おまえはとんでもないことをしたぞ、まあ見ていろ」

しばらくのあいだ、子供たちは泣きじゃくった。母親

は寝台のふちにかがみこんで、二人をいっしょに抱き締めていた。そして、単調な声で二十ぺんもこの文句をくりかえした。

「ああ！　おまえたちさえ、いなかったらねえ、かわいそうに！……おまえたちさえ、いなかったら！……おまえたちさえ、いなかったら！……」

しずかに横たわって、頭上の色あせたインド更紗のぼろぎれを見上げていたランチエは、もうなにも聞いてはいなかった。ある一つの考えにとりつかれ、それだけしか頭になかった。一時間ちかくもそうしていた。瞼にのしかかるような疲労だったが、睡魔にも負けなかった。彼がきびしい、きっぱりした顔つきで、肱のうえに身をおこして振り向いたとき、ジェルヴェーズは部屋のかたづけを終わりかけていた。彼女は子供たちを起こして着物を着せてから、その寝床をちゃんと整えた。彼は、彼女がほうきを使い、家具を拭くのをながめた。部屋はあいかわらず黒っぽくみじめだった。天井はすすけ壁紙は湿気ではがれ、三脚の椅子もたんすもびっこで、いくら雑巾がけをしても垢がこびりついてとれなかった。それから、ひげ剃り用に彼のつかう、窓の掛け金にぶらさげた丸い小鏡のまえで彼女が髪をときなおし、水をざぶざぶつかってからだを洗っているあいだ、彼は女のあらわな腕や頸や、そのほか目にはいる裸の部分をどこもかしこもじろじろと探っているようにみえた。頭のなかでなにかの比較をはじめているような様子だった。そして、やりきれんというふうにくちびるをとんがらした。ジェルヴェーズは右足がびっこだった。が、人にそれとわかるのは、たいてい働きに出た日で、腰がいたみからだをかまっていられないときだけだった。今朝は、ゆうべのことで精も根もつきはて、彼女は足をひきずったり、壁によりかかったりしていた。

沈黙が支配していた。二人はもう一言もかわさなかった。男は相手の出方をまっているふうだった。彼女は痛みをかばいながら、むりに平気な顔をよそおってせかせかと立ち働いた。隅のほう、トランクのうしろになげこんであった汚い布ぎれで彼女が包みをつくっていると、彼はやっと口をひらいてたずねた。

「なにをやってるんだ？……どこへゆくんだ？」

彼女は最初、答えなかった。すると彼がひどく怒っておなじことを問いかえしたので決心した。

「見ればわかるでしょ……。これを洗いにゆくの……。泥だらけのものを子供に着せとくわけにもゆかないわ」

彼女がハンカチを二、三枚かきあつめる。彼はそれを黙って見ていた。だが、その沈黙をやぶってまた言った。

「金をもっているか？」

とたんに彼女は立ちあがり、手にした子供のきたないシャツを放しもせずに夫の顔を見すえた。

「お金ですって！　じゃあ、あんたは、あたしにどこかで盗んでこいとでも言いたいの？……よく知ってるじゃないの、一昨日あたしの黒いスカートに三フランあったこと。あれであたしたち二度も昼御飯をたべたのよ。あっというまになくなったわ、おかず屋で。ほんとに、お金なんかないわ。洗濯場の四スーだけよ……。どこかの女みたいに、あたしゃ、働きがありませんのでね」

彼はこのあてこすりを気にとめなかった。寝台からおりて、部屋のぐるりにぶらさがっている、いくつかのぼろぎれを見てまわった。結局、ズボンとショールをはずし、たんすをあけて女物のブラウス一枚と下着二枚を包みに加えた。そしてジェルヴェーズの両腕にそのひとまとめ全部を投げわたして、

「そら、これを質に入れて来い」

「子供も入れてこいとは言わないの？」と彼女はたずねた。「どう！　子供で金が借りられるなら、けっこうな厄介ばらいになることね！」

けれども、彼女は質屋へ出かけた。半時間ほどして帰ってくると、暖炉のうえに五フラン貨をおき、質札は二つの燭台のあいだにあるほかの分といっしょにした。

「これだけ貸したわ」と彼女は言った。「六フランと思ったけど、しかたがなかったの。まったく、質屋なんてつぶれっこないわ……。あそこは、いついっても大繁昌よ！」

ランチェはその五フラン貨を、すぐには取らなかった。彼女が小銭にくずして、そのいくらかをくれればいいと思っていたらしい。だが、たんすのうえに紙包みのハムの残りとパンの切れっぱしを見ると、はらを決めて、金をチョッキのポケットにすべりこませた。

「あたし牛乳屋へは寄りつかないのよ。一週間分借りがあるから」とジェルヴェーズは言いわけをした。「でも、はやく帰ってくるわ。留守のあいだに、あんた、パンと豚の骨つきを買いにいってきてね。それでお昼御飯にするわ……。それからぶどう酒も一瓶持ってこさせて」

彼はいやだとは言わなかった。仲直りができたように思えた。若い女は汚れ物をひと包みにしてしまった。だが彼女がトランクの底からランチェのシャツや靴下を取りだそうとすると、彼はそのままにしておけと叫んだ。

「おれの下着はほっておけ、いいか！　いやなんだ！」

「なぜなの？」と立ち上がりながら彼女はきいた。「まさか、あんたこんな汚れ物を、また着るつもりじゃないでしょうね？　洗わなきゃだめよ」

そして不安になり、彼をまじまじとながめた。小粋なこの若者の顔はあいかわらず無情だった。さっきから一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb